はじめに

「あの人ってホントいるだけだよね……」
「いや、なんにも役に立ってないんだから、いるだけで罪なんじゃない？」

会議が終わってこんなふうに陰口を言われているのに気づいたら、あなたはどんな行動を起こしますか？

「見返してやる！」と思うでしょうか、それとも「それでもいいや……」と思うでしょうか。

ジンザイには4つのタイプが存在します。

① 人罪
② 人在
③ 人材
④ 人財

冒頭に挙げたのは、ただいるだけの「人在」です。また、会議で周りの人たちのモチベーションを下げるような言動をする「人罪」もいるはずです。そうかと思えば、会社（上司・同僚・部下）から「あの人は会社の宝」だと言われるような「人財」も存在します。

どのタイプのジンザイも、最初は将来を期待される「人材」＝「育つ素材」であったはず。最初は「人材」だったはずなのに、どうしてこのような違いが生まれてしまったのでしょうか？

それはハッキリしています。

おそらく、会社で数年働くうちに「自分はこんなものだ」と少しずつ自分の可能性を信じる力を失っていって、それに慣れてしまったからではないでしょうか。

「人罪」も「人在」も、ある時点で少し道を外してしまっただけにすぎません。そのため、仕事でこれといった成果が出せなくて、自分はこんなものだとあきらめてしまったのです。

人間には可能性があります。

いくつになっても〝志〟をたしかに持って行動すれば、人間はどこまでも進化発展していきます。

ケンタッキーフライドチキンの創業者カーネル・サンダースは、数々の挫折を乗り越えて70歳でフランチャイズ事業を起こしました。日清の創業者である安藤百福氏は、40歳を超えて無一文になりながら自宅の庭でインスタントラーメンを開発し、カップラーメンの世界的大ヒットにつなげています。また、江戸時代に精密な日本地図を作った伊能忠敬は、50歳から天文学を勉強し始め、56歳から測量を始めています。

人間には可能性があります。
だから、あなたには可能性があります。

しかし、可能性を最大限に発揮するためのコツを知らないのです。そのコツこそが本書で提唱する「アナログ力」です。

「アナログ力」とは、「デジタルでは実現できない成果を生み出す〝人間的な力〟」のことをいいます。

この力は、誰でも身につけることのできる〝十歩先の力〟です。

阪急電鉄の創業者で、宝塚少女歌劇団（宝塚歌劇団の前身）の生みの親、小林一三氏は「**百歩先を見**

る者は狂人扱いを受け、現状のみを見る者は落伍する。十歩先を見る者のみが成功する」と言いました。

出典：『大失敗にも大不況にも負けなかった社長たちの物語』柴崎伴之　２０１１年８月17日　１３２ページ

日常の仕事で、百歩先を見据えることはさほど必要ではありません。しかし、現状ばかり見て、それに振り回されてばかりいるのも考えものです。

デジタル蔓延社会では十歩先、すなわち、少し目先の力である「アナログ力」を強化するだけで、周りの人に一歩抜きん出たアイデアや成果を生み出すことができるようになります。

申し遅れました。私は生協で働くサラリーマンです。生協では、協同購入（食品配達）のお兄さん、メンバー（生協では組合員さんといいます）勧誘の地域訪問、そしてさまざまな商品の営業も経験してきた根っからの「生協マン」です。大学の４年間、生協の店舗でアルバイトをしていたことからも、それがおわかりいただけることでしょう。

27年におよぶ生協人生の中で、私がもっとも力を入れてきたのが「人を育てること」です。人を育てる手段である研修プログラムを開発し、講師としてそれを実施することで多くの人の育成に関わってきました。

人材育成に関わってきて、ずっと気になっていることがあります。それは「自分の人生を豊かにする」というモチベーションが低い人たちの存在です。

ワーク・ライフ・バランスという言葉があるように、人生には「ワーク（シゴト部分）」と「ライフ（プライベート部分）」があります。とくに前者の「ワーク」において、目が死んでしまっている人が多いのです。それも、中堅と呼ばれる30代から40代に顕著に現れていると感じています。

17世紀に活躍したフランスの作家ラ・ブリュイエールは、「**人間には三つの事件しかない。生まれる・生きる・死ぬ。生まれることは感じない、死ぬことを苦しむ。そして生きることは忘れている**」と言っています。この中の「生きることは忘れている」について、17世紀に指摘されて数世紀たつにもかかわらず、現代においていっそう顕著になっているのではないでしょうか。

出典：『座右の銘―意義ある人生のために』「座右の銘」研究会　２０１０年４月28日　１１４ページ

本書で提唱する「アナログ力」は、デジタル化の荒波にさらされ、技術革新の時期をどの世代よりも長く生きてきた30代から40代の人にもっとも伝えたいスキルです。また、デジタル三昧でアナログをあまり知らない若い人にも役立てられるスキルだとも確信しています。

30代から40代の人たちは、留まることのないデジタル技術の進歩に必死に追いすがってきた世代です。

たとえばスマホ。この世代は固定電話、ポケベル、携帯電話（ガラケー）と目覚ましい技術革新の荒波にもまれてきました。あまりの激変ゆえに、AndroidとiOSの違いもよく理解していない人が多い世代です。

この世代は、デジタル技術の進歩に必死に追いすがってきたために、アナログを見つめ直す時間を持てず、そのよさをないがしろにしてきた世代だともいえます。しかし、よくよく考えてみれば「アナログ」そのものを知っている世代でもあります。

近年、世の中はデジタル化しすぎています。

あらためて、アナログの温かみに注目してみませんか？

本書で提唱する「アナログ力」によって人間的で温かみのある仕事スキルを強化すれば、あなたの〝魅力〟で周りの人を惹きつけられるようになります。そこに集まった人たちは、あなたに力を貸すことを厭わない人たちです。その人たちの協力によって劇的な成果を発揮することも可能です。これこそ「人財」の働き方です。

本書では、第1章でどうして「アナログ力」を提唱するのか、その社会的背景を示しながら、「デジタル力」との違いを明確にしていきます。第2章ではアナログ力の中でも重要な位置づけの「図解力」を、第3章では図解を活用した「ノート力」を、第4章においては仕事の成果を劇的に向上させる「整理整頓力」、第5章であなたに人格的な魅力が備わる「言魂力」を、そして第6章においてあなたの経験値を向上させ、判断力・決断力を高める「歴史力」、締めくくりとして、それまでの学びを総合して、掛け算でアイデアを生み出すことができる「コラボ力」についてお伝えします。

仕事は一人ではできません。他人（上司部下同僚、取引先、お客さまなど）がいて成り立つものです。仕事の目的は〝夢〟をかなえることです。あなた自身の夢もそうですし、会社の夢（理念）もそうです。夢は「ＹＯＵ・ＭＥ」、「ＹＯＵ（あなた）」と「ＭＥ（私）」が手を取り合った言葉です。夢（や目標）は他人と力を合わせてこそかなうものなのです。

アナログ力を身につけて、あなたの魅力を劇的にアップさせ、人をどんどん惹きつけていってください。決して難しい力ではありません。「今さら……」と思わず、「今から！」とリラックスして読み進めていけばいいと思います。行動を起こさなければいつまでたっても何も変わりませんから。

進化論を提唱したイギリスの自然学者チャールズ・ダーウィンは、**「生き残るのは、最も強い種でも、**

最も知的な種でもない、最も変化に適応できる種が生き残るのだ」と、私たちにメッセージを遺してくれています。

出典：『今日をステキにする科学者の名言』　朝日新聞　東京理科大学広告　２０１５年６月14日　13版　30ページ

「行動」の人のみが変化を起こせます。それも、考えながら働く「考働」の人だけが。

本書で「アナログ力」を身につけて「考働」のレベルを飛躍的に引き上げていきましょう。

読者のみなさまが、本書をきかっけにしていっそう充実した毎日を送ることにつながれば、これほどうれしいことはありません。

２０１８年８月吉日　　宮田　政勝